

《優秀賞》

「受け継がれる想い」

二本松第三中学校 二年 丹野 千咲

古くからの伝統を受け継ぎ、深い歴史を擁する私達の故郷、二本松。ここに住む私たちの誇りとも言える二本松城、そのすぐ近くに、大きな石碑がある。横幅およそ八メートル、最大幅およそ五メートルの大石に刻まれた十六字の戒石銘は、私たち市民の心に根付く教えとなって久しい。戒石銘に刻まれた文字は、「爾俸爾禄 民膏民脂 下民虐易 上天欺難」つまり「あなた（武士）の給料は、民が汗と脂を掻いたものから得ている。この気持ちを忘れて民を虐げるのは簡単な事だろうが、そんな事をすればきつと天罰が当たるだろう。」といった意味だ。

この戒石銘は、江戸時代に丹羽高寛公が藩の儒学者である岩井田昨非の進言によって刻ませたものだそうだ。私は今まで戒石銘についてあまり深く知らなかったので、詳しい意味を知ると、たった十六字が心に染み渡っていくような思いがした。今の人々が忘れがちな感謝の気持ち。その気持ちを大切にしろ、という意味を感じ取れたからだ。毎日の様々な出来事の中で、きちんと感謝すべき場面が多々あったはずなのに、次から次へとやるべきことに追われ、

「ありがとう。」の一言さえも言わずに時を流してしまったことがな
んと多かっただろう。

しかし、この戒石銘が刻まれた当時の人々はこの内容をどう思っ
ていたのだろうか。虐げる事を良しとしない、という考え方は、当
時虐げられやすい身分にいた人々にとって喜ぶべきものだったので
はないかと私は思う。また、綱紀肅正の指針として、武士の心にも
深く根付く教えとなり、当時の二本松藩士を支えたのではないだろ
うか。

感謝の気持ちをおれないようにすること、弱い者を虐げな
いようにするということ。当たり前のように思えるが、とても大切
な事だ。その精神が二本松藩士を奮い立たせたように、私達も今、
この教えを見習うべきではないだろうか。

今、この瞬間にも、貧困で苦しむ人、住まいの無い人、戦争で傷
付く人がいる。そんな中で、衣食住に不自由無く安全に暮らしてい
る私達は、それを普通の事だと思い、感謝の想いを忘れてしまっ
ていたり、弱い者を虐げたりしていないだろうか。ありがとう、とあ
まり言われなくなり、いじめ問題が多発する現代社会で、今こそ戒
石銘碑の教えをもう一度心に刻むべきではないだろうか。

私はこの戒石銘碑の意味を知って、郷土である二本松により愛着
と誇りを持てたと思う。今まで私は、なぜ戒石銘碑がそこまで重要
に扱われていたのかよく分からず、疑問に思っていた。しかし、戒

石銘碑の意味を深く知り、教えを読み取れた事で、大切にされる価値に気付き疑問が納得に変わった。そして、行動を起こす時の参考にしたと思う。また、二本松市内、ひいては県内や東北地方内に、このような史跡はどのくらい残っているのかという興味を湧いてきた。機会があれば、詳しく調べて郷土への理解を更に深めたいと考えている。

これから生活を続ける中で、受け継がれてきた十六字の精神を大切にし、絶やさぬようにしたいと思う。江戸時代、藩士達の心に刻まれた想い。それは、現代社会で今思い出すべき大切な事を、私達に教えてくれた。そして、今まで受け継がれてきた教えと想いを次の世代へ伝え、それぞれの時代に大切な事とは何か、ずっと考え続けてほしいと思う。